

まちを守って100年、東川消防団

東川消防団は、1920（大正9）年4月に公設消防組と認可されてから2020年で百周年を迎えました。これを記念し、昨年11月21日にせんとびゅあーにて記念式典が行われました。「主催・東川消防団創立100周年記念事業実行委員会（藤田尚量委員長）」式典では、これを機に分団旗を更新。新分団旗は式典で松岡市郎町長から林克政消防団長へ目録が授与され、林団長から各分団長へ授与されました。松岡町長は「東川消防団は、設立以来、万が一の災害に際し『住民の生命・身体・財産を身を賭して守る』という大きな重責を担わ



▲各分団長（左5名）、林団長（右）

れてきました。設立時の精神をしつかりと受け継ぎ、1世紀の歴史を積み上げてこられた全ての団員と地域のみなさまに敬意を表します。心から感謝申し上げます。心からこの精神が次の世代に受け継がれていくと確信しています」と挨拶。

また、35年以上の長きにわたり防災にご尽力された元消防団員の3名に、表彰状と記念品が贈呈されました。表彰の受賞者は次のとおりです。（敬称略）

- 元東川消防団長 上村栄一（勤続42年3月）
- ▼前東川消防団長 金盛勇松（勤続40年）
- ▼元東川消防団副団長 成田隆（勤続35年11ヵ月）

若年性認知症―受け入れて、前に進む

11月13日、せんとびゅあーにて若年性認知症（65歳未満で発症する認知症）についての講演会が開催されました。「主催・地域包括支援センター」

実際に若年性認知症の方を介護した経験のあるお二人に、発症初期の様子や困りごとなどをお話いただきました。妻

の介護をしていた伊藤勝治氏は、「認知症になると環境の変化に不安を感じる。引越しても前の家に歩いて戻ろうとしてしまう」といいます。行方不明になったら迷わず警察に協力を求めることも必要です。「人に頼る



▲「同じ経験をした人と話すことで、不安が和らぎます」緑川氏（右）

ことを恥だと思ってしまうが、介護は人の力を借りることが大切。頼めるようになれば気持ちも楽になる」とアドバイスを。また、父を介護中の緑川広明氏は「愛情をかければ愛情を返してくれる。たとえ会話をできなくても、相手の気持ちを察して受け止める」こと

が意思疎通。いつも話しかけています」と笑顔で語ってくれました。

初期の症状は認知症かどうかの判断が難しく、誰に相談したらいいか、何の申請をすればいいのかわからないものです。悩んだら地域包括支援センター（役場内）や、若年性認知症家族会・旭川ひまわり会（旭川市錦町、☎090-1389810418）に遠慮なくご連絡を。

音楽を楽しむいろんなカタチ

昨年11月21日、小西健二音楽堂にてドートレトミュージーが14回目の定期コンサートをを行いました。ゲストは東京音楽大学卒の清川大介さん（写真右）、同大学院卒の秋元一夢さん（写真左）の新進気鋭な二人。繊細で表情豊かにピアノをつま弾く秋元さん、驚くべきは



「ピアノは7歳から独学で始め、先生に習い始めたのは高校一年の時」ということ。何かを始めるのに年齢は関係ない、とチャレンジする勇気をくれました。清川さんは「トランペットの音色は人間の声に近く、歌声にも喩えられる」ことを紹介し、秋元さん・キョウ

スケさんと3人でコラボレーション。歌声とトランペットの音色が重なり、見事なハーモニーが生まれました。

翌月22日は、小西健二音楽堂で『クラシックをあなたに』を初開催。ドートレトミュージーがコーディネートするクラシックコンサートの新シリーズです。初回は前日の定期コンサートでゲストとして登場した秋元さん、清川さんがメインで演奏。午前は『親子で楽しむクラシック』で、お子さんにおなじみの曲をラインナップ。「クラシックと言えば静かに聞くイメージだけど、このコンサートは手拍



子、足踏みしながら聞いてね」と、子どもたちに全員で「音」を「楽」しんでもらいました。清川さんは「トランペットは唇の振動の細かさで音を吹き分けるので、実は押さえるボタンを要えなくてもいろんな音が出ます」と実践しながら紹介。その様子に会場からは「おお……！」と驚きが聞こえてきました。秋元さんは「ピアノは多くの音を一度に奏でられるのが魅力。1音が力強いトランペットとの違いも楽しんで」とそれぞれの楽器の良さも教えてくれました。午後はオトナ向けの『あなたと楽しむクラシック』。初めてクラシックに触れる人でも聴きやすいようにと、曲目はさまざまな国のも

映画でラトビア文化に触れる

昨年11月14日・15日の2日間、せんとびゅあーにて「ラトビア映画と過ごす週末」を開催しました。ラトビア独立記念日の11月18日に合わせ、ラトビアの国際交流員・アルタさんが企画。映画は日本人が出演している作品で、上映前には製作経緯や国の歴史・文化などの簡単な紹介があり、親しみやすさ抜群でした。

14日の『ルッチと宜江』（2015）は、ラトビアのスイティ民族を研究する日本人大学生・ノリエが、ラトビア女性ルッチの家で暮らすドキュメンタリー。なんと一昨年11月に来町したバンド・Ami（アウリ）のメンバー・マーティンスさんは、このモデルであるルッチさんの孫にあたるそうです。思わぬところで東

川とラトビアの繋がりがあってびっくり。

15日は『魔法の着物』。日本では『二人の旅路』（2017）として知られる、桃井かおり主演の映画です。作中の「鎖のように人々が手を繋ぐ」シーンは、『バルトの道』を模しています。これは1989年、ソビエト連邦の

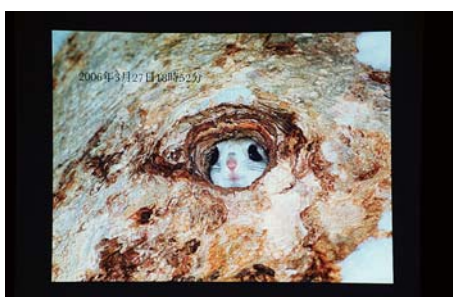


▲国についての話が深い！ところも人気でした。

統治下にあったバルト三国（エストニア、ラトビア、リトアニア）で約200万人が600kmの人間の鎖をつかったデモ活動のこと。自由と平和を求めた世界へ向けたメッセージが込められています。

大雪山の「野生」鮮やか

昨年11月28日、せんとびゅあーにて大雪山アーカイブス講演会『野生（ワイルドライフ）のエンジャー』を開催しました。写真家・山岳ガイドの大塚友記氏に、「じっと待てば道路脇にも野鳥が来る」という身近な大自然・キトウシ森林公園から大雪山連峰に至るまで、プロならではの写真と映像で紹介いただきました（ドローンによるこれまでと違った視点からの景色も新鮮！）。【春】旭岳エリアでは温泉熱で5月下旬から雪解けし、日ごとにさまざまな花が姿を見せます。野鳥にとっても恋の季節なので、この時期が一番見つけやすいのだそう。【夏】大雪山の魅力は、



▲「うわ〜かぁいい〜」と声の上がついたエゾモモンガ

本州の3千級にしかない貴重な高山植物が広大な花畑を形成すること。雪解け時期にもよりますが、7月中々下旬の榎合平は壮大で、【秋】は紅に染まります。【冬】の動物といえば、大人気のエゾモモンガ。かつて大塚氏も「小さい動物が厳しい自然環境の中で生き抜いている」ことに感動し、写真家の道を歩み始めたそうです。

氏の写真は「大雪山の四季カレンダー」でも味わえます（ARで動画も見られる！）。町内では道草館、フレンドシッブながさわ（南町1）、MINA（西8号北13）で販売中です。今年1年を絶景と共に過ごしませんか？